

私はこの2日間で心身ともに大きく成長することのできた貴重な時間を過ごすことができた。笹川平和財団主催のディスカッションでは、世界を相手に仕事をするということについて、深く考えさせられた。

特に印象に残っているのは、大久保郁子さんのお話である。大久保さんは、日本財団に入社して2年目の若手社員である。大久保さんの主な仕事内容は国際協力だそうで、アジアの特に貧しい地域の青年へ大学進学のための奨学金を貸すプロジェクトや、フィリピン残留日本人孤児の方々の国籍回復のプロジェクトなど、合わせて8つのプロジェクトを担当しているという。フィリピン残留日本人孤児の国籍回復のプロジェクトについて詳しくお話を聞くことができた。フィリピン残留日本人孤児とは20世紀初頭から第2次大戦前にかけてフィリピンに渡った日本人移民の子のことであり、父親に日本人、母親にフィリピン人を持つ事例が多いそうだ。日本財団としては、フィリピン残留日本人孤児の方々の日本国籍を回復するために、現地を訪れ、証言人を捜すための資金提供をしていて、パートナー（現地に出向き調査する企業）との関係を密にし国籍回復に貢献しているそうだ。

戦後3500人だったフィリピン残留日本人孤児も高齢化に伴い、今では1200人まで減ったが、国籍を取得出来る人は年間10人もいないという。戦時中、子と母親は日本国籍であることが公になれば収容されるなどの差別を受けたため、日本国籍であることを伏せるために重要な書類を燃やしたことが国籍取得を困難にしている原因の1つだという。

「その若さで8つのプロジェクトを担当しているということは大変ではないのですか。」と、質問すると、入社してやいなや大きな仕事を担当することへ不安はあるが、会社は若い社員にも大きな仕事をするチャンスを与えてくれる。若いうちは失敗することも成長するためには大切だと捉え、不安で消極的になるのではなく、積極的にぶつかって行くとおっしゃっていた。また、フィリピン残留日本人孤児の日本国籍回復のプロジェクトではフィリピン残留日本人孤児の平均年齢が86歳を超え、日本国籍回復を望む方たちに残されている時間が少ないので、時間が限られていることを常に意識して、仕事をしているそうだ。

また、海外で仕事をしている方々でおっしゃっていたことは、英語力である。

中には通訳を雇い、英語は使わないという方もいらっしゃったが、私たちと比較的年齢に近い方は、今の社会では英語力が必要だとおっしゃっていたので、私はその方の意見を受け止め、英語力をつけたいと思った。

海外に勤務すると、英語で仕事の内容を話すことはもちろん、日本について外国人に話す機会が多いそうだ。

海外からの日本への興味・関心は非常に多いそうで、外国人に日本のことを聞かれたら、1人の日本人として胸を張って日本の話をしてほしいといわれた。

企業大学訪問では、私たちの班はアポ取りの段階から苦戦し、6回目の電話でやっと手にした訪問先だった。

一橋大学経済研究所北村行伸教授にお話を伺った。

まずはじめに北村教授の研究の1つであるミクロ経済学についてである。ミクロ経済学については訪問前に調べて自分なりに理解はしていたが、教授はどう解釈しているかについて聞くことが出来て良かった。

GDP や財政政策についてなど、大きな経済についてをマクロ経済学という。GDP や財政政策などをミクロレベル(個々の消費者、個々の企業の視点すなわちミクロ経済学)で統計などの資料を用い、数値を読み解きながら、政策がどう捉えられているかなどを考えることがミクロ経済の面白みだと語ってくれた。

私は母子家庭の子どもの貧困と公共経済について質問した。

母子家庭の子どもの貧困になる主な原因は母親が低所得であること。母子家庭の母親のほとんどは非正規雇用であるため、低所得になってしまう。

また、母子家庭の8割は離婚が原因で母と子での生活となっている家庭が多く、夫が支払わなければならない養育費が支払われていないなどの理由もある。

母子家庭で育った子が、大人になっても貧困で苦しむというケースが多いのは何故かについて詳しくお話していただいた。

よく聞く、高校、大学に進学できなかったために収入の安定した職につけず大人になっても貧困であるとは少し視点の違った答えに驚いた。子どもの脳の発達が特に著しいのは 0~3 歳の生まれてから約 1000 日の期間だと言う。

その期間に普通の家庭の子どもであれば、母親と過ごしたり、保育園に通ったり、大人と接する時間が充分にあるため、大人から多くの刺激を受けて育つのだ。しかし、母子家庭の子どもは母親が仕事で家にいる時間が長くなかったり、保育園に通えなかったりと、刺激を与えてくれる大人が周りにいないので、脳や心の発達が遅れてしまうそうだ。その遅れが、普通の家庭の子どもの差を生み、貧困が繰り返されてしまう。

国や任意団体が高校や大学への進学が難しい子どもに奨学金を貸し出しているが、本当に補助をしなければならないのは、一番ケアが必要な 0~3 歳の時期なのではないかとおっしゃっていた。社会学的な問題も公共経済の面から分析し解決策を考えられるということがよく分かった。二高 OBOG との懇談会では、まず東大生のオーラに正直引いた。

私の中では東大に進学するような人は苦手教科がなく、どんな教科も得意だというイメージがあり、私には遠い存在のように思う。

実際に話を聞くと、〇〇がとても苦手で苦戦したなどの声も多かった。しかし逆に、〇〇は得意教科だったから、1年生のうちに予習を進めて2年生の内容まで終わっていた。世界史の教科書のページ毎に出てくる語句や内容を全て把握していた。等、私にとってはかなりレベルの高いことをこなしていることを知った。

高校時代ソフトテニス部だったと言う OB の先輩からも高校時代の学習方法などのお話を聞くことができた。

「部活でどんな疲れていても短時間でも良いので必ず集中して勉強した。」と言う言葉を聞いてもっと自分も頑張らなくてはという励みになった。

OB の方々も笹川平和財団を始めとするお話して下さった方々同様に英語力の大切さについて話していた。また、大学では、英語だけでなく他の国の言語も進んで勉強することを勧められた。

宴会場の帰りに、とんでもない出来事が起きた。

「Sorry.○☆#◎▲□♡▽●◆□◎……………」

いきなり話しかけられたことへの動揺と、相手が言ったことが聞き取れなかったことへの焦りで固まってしまった。

自分の知っている単語を使ってなんとか答えようとしたが、うまく伝わらなかったようで諦めて行ってしまった。OBの先輩の中で、リスニングが苦手な毎日15分NHKラジオを聞いて苦手を克服できるまで粘り強く取り組んでいた、という先輩がいた。

私は勉強面でも部活動の面においても、この先輩のように自分から努力して毎日やっていることがあるだろうか。口先だけの理想で止まっていないだろうか。

高校に入学してからのこの3カ月自分が思っているよりも、反省すべきだということに気がついた。理想だけ高くても、それを現実にするために行動しないと意味がないことを改めて感じた。東京大学オープンキャンパスでは、経済学部を見学した。経済学部では2つの模擬講義を受けた。日本経済の課題と数字で企業を読み解く財務分析についてだ。財務分析については、前日に北村教授からデータベースを用いて経済を分析する楽しさや魅力についてお話していただいたので、話を聞いて納得できる部分もあり嬉しかった。日本経済の課題についての講義では、私たちの生活にとっても身近な「消費」を経済理論を使って考える活動をして、グラフを用いる考え方が難しく感じたがとても興味を持てた。

私の中でこの研修のテーマは、企業大学訪問先が経済研究所だったこともあり、「経済に触れる」ことであった。テーマ通り、経済について深く知ることができ、研修前よりも経済に対して興味を持つことができた。

そして何より、普段話を聞けないような世界を相手に仕事をしている方々や、有名教授にお話を聞けたことがとても大きなものであったと思う。自分の人生は自分の力で切り開くということを改めて強く感じさせられた。

二高OBOGの先輩方も、絶えまない努力があったからこそ今の立ち位置にいるということを感じ知らされた。今自分に足りないものは何なのかも深く考えることができた貴重な体験ばかりであった。

この2日間のような時間は人生のなかで今回のたった1度なのだろう。だからこそ、今回自分の心に誓ったことや、感じたこと、学んだことを普段の生活で思い出し、日々過ごしていけたらと思っている。